



コーヒー文化論



拓殖大学名誉教授 飯森嘉助

拓殖大学名誉教授・飯森嘉助先生が平成24年5月27日に逝去され、75歳の生涯を閉じられました。飯森先生は平成15年に拓殖大学を退任されたのちも、イスラーム研究所の研究会に毎週、出席され、その豊富な見識によって研究員に多くの示唆を与えてくださいました。

飯森先生が研究会にて平成23年1月に発表された「コーヒー文化論」が最後の発表となりましたが、ここに飯森先生の遺稿として掲載いたします。

〔語源〕

「コーヒー」の語源となったアラビア語のカフワ (qahwa) は、元来、数あるワインの異名の一つでありました。カフワの語根 q-h-w の意味は「食欲を減退させること」であることから、酒類が食欲を減退させることと関係があるものと思われます。カフワが飲み物としてコーヒーの意味に転用され、その意味で定着されるようになったのは14世紀以降のことです。一部のアラブの言語学者はコーヒーの意味ではキフワ (qihwa) と読むことによって、ワインの意味とは区別すべきだと主張しました。しかし、その読みでは定着しませんでした。

トルコ語のカフヴェ (kahveh) はアラビア語のカフワに由来するものであり、ヨーロッパ各国語へはこのトルコ語を通じて伝えられました。そして英語の coffee という単語が初めて使われたのは1598年のことでありました。

さて、「コーヒー」の語源についてはアラビア語起源説のほか、コーヒーの木の原産地とされているエチオピアのカフファ (Kaffa) 州に由来するという説もあります。しかしエチオピアでは、飲料としてのコーヒーはバン (ban) と呼ばれていることや、イエメンにおける飲料コーヒーのその後の発展を考える時、カフワがカフファ州に由来する外来語であるとは考えにくいと思われます。

エチオピア語のバンと明らかに同語源と考えられるアラビア語のブン (bun) はコーヒーの木またはその実を示す時だけに用いられます。また、アラビア半島においてコーヒーは嗜好飲料とされる以前に薬用飲料として扱われていたのですが、最初の薬用コーヒーの記録者として知られているペルシャの医学者アッラーズィー (ラーゼス) (850 - 922) はそれをバンと同語源のバンシューム (banshuum) またはバンカ (banka) と呼んでいたそうです。

〔発見の経緯〕

コーヒーの発見譚 (たん) については粉飾された様々な話が伝え

られていて、どれもほとんど伝説の域をでません。しかし、エチオピアでは古くからコーヒーの果実 (甘味がある) を生食したり、乾燥した果肉を携帯食料としていたり、その後、豆と外殻 (果肉) を水に浸した飲料を飲んでいただけでも確かな様であります。この浸出飲料飲用の習慣はかなり早く (11世紀以前) から対岸のイエメンに伝えられていたに違いありませんが、アラブ側の資料ではコーヒーの発見者は後代の特定の人物ということになっています (14世紀中頃や、15世紀末など)。

彼ら発見者と称される人々は、みなイスラームの神秘主義者 (スーフィー) である点が共通しています。これは、いわゆるコーヒーの最初の飲用者達が神秘主義者の各グループであったことにもよりますが、後代になってコーヒー飲用の第一発見者を問われたとき、彼らの最も尊敬する神秘主義教団のリーダーたちをそれぞれ第一発見者と答えた結果だと推察されます。本来ならば、彼らのリーダーたちはコーヒーの普及者たちと言うべきところだと考えられます。

いずれにせよ、このあいだに炒った生豆を粉末にして飲用する焙煎法が発見されましたが、これこそコーヒー飲用文化の革命といえるものです。なぜならば、炒ることによって豆は一段と香りと風味を高めるからです。

〔イスラーム世界での普及〕

コーヒーは最初、神秘主義者の長い夜間の勤行を助ける眠気覚ましとして好んで用いられていました。同じ理由で、マッカの聖モスクやカイロのアズハルモスク学生や教授達の飲み物として普及していきました。こうしてコーヒー飲料は、14世紀から15世紀にかけてアラビア半島からエジプト・シリア・トルコ・イランなどの東方イスラーム世界 (マシュリク) まで広がりました。エジプトにコーヒー飲用を持ち込んだ者はアズハル (今日イスラーム世界最大の国際大学となっている、1000年の伝統がある学林モスク) へのイエメンおよびマッカ・マディーナからの留学生達でありました。彼らはモスクに付随したこの方面の留学生専用の寄宿舎 (ラワーク) に住んでおりましたが、この中でエジプトにおける最初のコーヒーが飲まれた可能性が高いようです。特に、夜間のズィクル (声を出してアッラーを賛美し続けること) の勤行に献身するさいに飲用されていて、毎月曜日と金曜日の夜がこれに当てられていたらしいのです。この勤行には一般の市民も参加していたので、やがてアズハル界限ではコーヒーが市民のあいだに浸透していったようです。

16世紀中頃のアラブ人によるコーヒーの定義によれば、コーヒーの実の外殻即ち果肉部 (パルプ) を煮立てたキシューヤコーヒー (qishriya) と、それに粉砕した炒り豆を加えたもの即ち外殻パルプに種実を加えたブンニヤコーヒー (bunniya) の2種類あったとされています。この2種類のコーヒーは19世紀のアラブ世界になっても変わっていません。また、現代のイエメンではキシューヤコーヒーに肉桂皮やショウガやサフランやカルダモンの実を加えたものが最も多く飲まれているようです。

コーヒーの実の果肉部分には糖分が若干含まれていることもあって、本来のアラビアコーヒーには砂糖を加えません。商業的のコーヒーは最初、水や清涼飲料と同様に市中の行商によって売られていたということです。16世紀末にヨーロッパ人がトルコをおとずれて、そこで出会ったコーヒーは行商コーヒーであったといわれています。

やがてコーヒーの愛飲家の数も増えて都市部におけるコーヒーの大衆化が始まると、マッカにはじめてコーヒー店が現れました(1475年頃)。こうしてコーヒー店はアラブ世界の大都市を中心に普及し、やがてイスタンブールに最初の本格的なコーヒー店が営業を開始しました(1554年)。

〔マッカ、カイロでの禁止騒動〕

コーヒー店は客寄せのために歌や音楽や踊りなどを供するようになっていきました。また、そこはチェス遊びやマンカラ(manqala)、ナルド(nard)と呼ばれる一種のアラブすごろくの溜まり場ともなり、もはや庶民にとって欠かせない憩いの場になっていきました。

しかし、一部のコーヒー店では享乐的傾向を強め、イスラームで禁じられている酒場の雰囲気を感じ出し、同じくイスラームで禁じられている賭博が行われる場所でもあったようです。

こうした風潮に対してイスラームの教義に厳格な宗務官などから非難の声が上がり、コーヒー受難時代を迎えることになりました。

最初の火の手は聖地マッカで上がりました。このコーヒー禁止騒動はヒジュラ暦917年(1511年頃)に起こった事件でした。当時、マッカではコーヒー抜き夜の勤行やマウリド(預言者の降誕祭)は考えられませんでした。聖モスク内におけるコーヒー飲用の現場をカイロのスルタンによって任命された厳格なムフタシブ(市場・風紀取締官)兼マッカ駐在マムルーク騎兵隊長ハーイル・ベク(Khair Bek)が目撃して、異様な雰囲気を感じ取ったというわけです。

そこで、彼がマッカのコーヒー店の実情を問いただしたところ、かなり享乐的であるうえにイスラームでは禁じられている男女混交の場であり、また賭博の場でもあると聞かされて、風紀取締官としての対処を迫られたというわけです。

そして彼は直ちにマッカの法官達(ムフティーやカーディー)、宗教学者、神秘主義者その他の有識者を集めて現行のコーヒーの飲み方が不法であるとの合意を取り付け、さらに二人の医師を召喚して、この飲み物が心身にとって有害であるという証言を取り付けたということになります。もちろん、これに反論したコーヒー党の宗教学者もいましたが、反コーヒー党の急先鋒であった宗教学者アルハティーブ(al-Khatibu)などの画策によってついにマッカにおけるコーヒーの飲用はいっさい禁止されることになりました。

これによって飲用者はその場で激しく叱責されるとともにコーヒー店はいっせいに手入れを受けて、豆は見つけしだい焼却されました。人々は恐れて家庭内でひそかに飲用を続けましたが、これを告げ口されると、叱責されたあと、市中を引き回しにされました。

マッカの禁令は最終的にはカイロのスルタンの認可と勅令をファトワー(イスラーム法に基づいた法勧告)の形で取り付ける必要がありました。しかしカイロからのファトワーの趣旨は以下のようなものでした。

「ザムザムの聖水でさえそうであるが、コーヒーに酒を混入して飲むなどは明らかに不法である」

このようなファトワーによる追認は裏を返せばコーヒーそのものは不法ではなく、マッカのような飲み方が不法であると言っているに過ぎないようです。その証拠にスルタン・ゴリー(在位1501-1516)はお膝元のカイロでコーヒーの飲用を禁止することは決してしませんでした。いずれにせよ、マッカの人々はふたたびコーヒーを公然と飲みはじめました。こうしてこの騒動は1年足らずで終わりましたが、そのあいだに反コーヒー党の前述したアルハティーブは人々の反発と反感の標的とされ、以下のような非難の詩をあげせかけられました。

ブンの木の кафワ(コーヒー)が禁ぜられた
だから君達はブドウの кафワ(ワイン)をすすればよい

それ(ワイン)を飲んで不機嫌になり

禁を謀った者(アルハティーブ)を呪うがよい

これは当時の流行詩ですが、この内容からも人々にとってコーヒーがいかに酒の代償的存在であったかを窺わせます。

カイロでの禁止騒動はアズハル学院の教授、シャーフィイー法学派のイブヌ・アブドルハック(Ibn-Abdul-Haqq)がコーヒー飲用の質問状に答えて、「不法」であるとのファトワーを下した(ヒジュラ暦941年、西暦1534年頃)ことに端を発しております。

不法とのファトワーを聞いた反コーヒー党に属する市民は、自然発生的に暴徒化して、コーヒー店を襲い、コーヒーカップを割ったり店内の客に暴力を加えたりしたのです。

この収拾はコーヒー党に同調的なハナフィー派の裁判官イブヌ・イリヤース(Ibn-Ilyas)に任せられました。そこで彼は自宅に人々を集め、コーヒーを供し、一日中彼らと対話し、彼らを観察しました。そして彼はこの結果にもとづいて異常なしとみて旧状に復して可なりとの判断を示しました。こうした禁止騒動はそののち、マッカでもカイロでもいく度となく繰り返されましたが、いずれも長続きはしませんでした。

コーヒー党の見解の骨子は、コーヒーの飲用が精神を活気づけ、宗教的勤行に大いに役立つものであるから、それ自体は禁止の対象にされるべきではない、というものであります。

一方、反コーヒー党の見解には、コーヒーを酒類とみなすコーヒー酒論や、心身に有害であるとする心身有害論や、踊りや音楽を伴いがちなので享樂防止論、賭け事を伴うとして賭博防止論、宗教的勤行を忘れて無為に過ごす風潮を生むとして怠惰防止論など様々な論陣を張って反対をしました。

また、イラクでは炒った豆は木炭とみなされ、木炭は食べ物にあらずとしてその飲食を禁ずる考え方で飛び出す始末でした。

〔世界の国々への広がり〕

1517年のオスマントルコによるアラブ世界の征服は、カイロにおけるコーヒー文化を本格的にイスタンブールに伝える契機となったのであります。

1554年には2人のシリア人企業家(アレppoとダマスカスの出身)によって最初の豪華なコーヒー店がイスタンブールに開かれました。これまでにマッカやカイロのコーヒー店論争を経た後の設立であっただけに、ここに集まる人々の多くは礼節を重んずる品の良い趣味人であったようです。そしてここは男性だけが集まる所であったことは申すまでもありません。もちろん、カフェの女給などがいるはずもなく給仕には着飾った美少年を配しました。

いずれにせよ、彼らお客達はチェスの愛好家であったり、水タバコ(nargil)の愛飲家であったり、とにかく談合好きな人々などで、詩人・文学者など才能のある一芸に秀でた者が多く集まったといわれています。まさに、そこは夜話の中心であり“ウラマー(学者層)の学校”と呼ばれるようになったそうです。

一方そこは、文学論争や政治論争のセンターでもありました。オスマン帝国のコーヒー店は、やがて政府を批判する民主主義勢力の集会所としての性格をそなえるにいたりますが、これに対抗するために、教義に厳格な宗教学者の勢力と宮廷勢力の利害とが一致することになりました。

こうして彼らはコーヒーを酒よりも害があると考えてコーヒー愛飲家を敵視して、ついにモラード3世治下(1603-1617)においてコーヒー禁止令が下されました。しかし、この勅令もマッカやカイロの場合と同様に、実効性に乏しく、長くは続きませんでした。

さて、時は流れて18世紀にアラビア半島で巻き起こったワッハービー宗教改革運動はクルアーンとスナナのイスラームの原点に帰れという運動でありました。当時のイスラーム世界は神秘主義の悪い側面に染まりきって墮落してしまい、イスラーム以前の状態の多神教に逆戻りしてしまった観がありました。

普通、アラブ・イスラーム世界の近代史の幕開けは「ナポレオンのエジプト遠征事件」(1798年)から解き明かされますが、その前に、イブン・タイミーヤ(1263-1328)の思想の影響を受けたとされるムハンマド・ブン・アブドル・ワッハーブ(1703-1787)が彼の

生まれ故郷、アラビア半島のナジド高原において、サウード家の全面的守護の元に、1744年から最初のイスラーム復興運動（イスラーム原理主義、純化運動）を起こしました。この運動を受け継ぐ一派をワッハーブ派と呼んでいます。その主張はサウジアラビア王国に受け継がれています。

いずれにせよ、ワッハーブ派は以来、厳格派イスラームをもって知られていますが、この派の見解によれば、タバコの吸引は激しく敵視しましたが、コーヒーについてはその飲用を合法と認めたので、同国においては今でもコーヒーが多量に飲用されております。

また、イスラーム世界において、コーヒーが酒類の常用を少なくともした功績は少なくないと言わねばならないでしょう。

17世紀にはトルコを経由してヨーロッパに紹介されたコーヒーとコーヒー店が大流行し、そのあいだ、イエメンから全世界へとコーヒーの輸出が続きました。そして当時の代表的な輸出港はイエメンの紅海に面するモカ（Mukha）港であったため、こんにちでもモカコーヒーの名前でその名が残っているわけであります。

このイエメンにおけるコーヒーの栽培は秘中の秘とされ、異国人を栽培地に決して近づけません。また、豆は火を通して発芽力を殺してから輸出されておりました。しかし、このコーヒー豆の独占はそう長く続きませんでした。

マッカ巡礼にやってきた某インド人ムスリムやオランダ商人などによって（イエメン人から入手した）苗木がひそかに国外に持ち出されてしまいました。それによってインド南部のマラバル（ムライバル）地方やセイロン島、ついでジャワ島などで栽培されるようになりました。やがてヨーロッパ人の手によって大西洋を渡り、ラテンアメリカではプランテーションとして大掛かりな栽培が行われるに至り、コーヒーの飲用は世界中に広まりました。

〔飲用方法の多様な慣習〕

その昔、コーヒーはキリスト教徒によって、イスラーム教徒が飲む飲み物といわれていましたが、今日の中東においては、紅茶の進出に圧倒されてその飲用は激減しつつあります。しかし、ベドウィン（遊牧民）や都市部でもベドウィンの性格を色濃く残している地域では、かつてのコーヒー飲用の伝統を連綿と引き継いでいるようです。

コーヒーは何よりも遊牧民特有のホスピタリティーと関連しています。また、紅茶のサービスと違う点は、それが極めて儀式的な意味をもっていることであります。つまりそれは日本の茶道とも通ずるいわばコーヒー道ともいべきものであります。

客人にコーヒーをもてなす際の流れは以下ようになります。まず、男性区と女性区はカーテンで仕切られていますが、男性区の中央にはコーヒー（お茶）立て専用の炉端が掘られております（サハラの遊牧民の場合はコンロに似たものをテントのなかにもちこみます）。

コーヒーは客の歓待に不可欠であるため、コーヒー立て用の燃料は、料理用とは別に男性区のなかにとってあります。水と豆は女性区に保存されているので、客が来ると仕切りカーテンごしに手渡されます。

豆は美しく装飾された皮製の小袋（mijraba）のなかに入れて保存してあります。そして来客があると、主人は客の面前で自らの手でコーヒーを立ててサービスいたします。

まず、3本足付の豆炒り器（mihmasa）の上で豆を炒ります。この際に攪拌棒（yad）で豆をころがします。

次に、木製または真鍮製の臼（haawan, jurm）のなかに入れて、これを杵棒（mihbaai）でつき砕きます。この際にリズムに合わせてつくので遊牧民の耳に心地よい音を響かせます。これはテントの主人の腕のみせどころでもあります。この音を聞いたものは誰でもコーヒーの招待を受けたと考えてよいのです。

ベドウィンのコーヒーポット（dalla）はペリカンのくちばしに似た注ぎ口をもった首長のポットで、真鍮製か銅製です。ふつうは大・中・小と三つ以上揃っていますが、このうちの一つに水を入れて沸騰させ、これにつき砕いたコーヒー粉末を入れます。

このポットは火にかけたり離したりして続けざまに3回沸騰さ

せ、これをカルダモンの実の粉末が入っている別のポットに移します。

こうしてできたコーヒーは取っ手のない小型のカップ（深い盃ほどのもの）に注がれて客に回されます。この際にコーヒーを立てた主人は、数個のカップ（finjaan）を右掌のなかに積み重ねて持ち、ペリカン口のポットを左手に持ってカップに3分の1ほどコーヒーを注ぎます。

差し出された客は数回お代わりをすることが礼儀にかなっていません。「もう結構です」といいたい場合は、人差し指と親指のあいだでカップを左右に振って返上するしぐさをしますが、それまでは何回でも注ぎ足されます。

コーヒーを立てるのはそのテントの主人ですが、給仕をする者はその家の最年少の子供であることが多いです。

いずれにせよ、紅茶については特にこれといった儀礼的な飲み方はしません。

以上のようない連のコーヒー立てセットはすべて男性区にまとめられてあり、それも手の届く所に置いてあるのですが、いずれも伝統的な美しいデザインで、装飾が施されています。

ベドウィンのコーヒーには砂糖を入れません。

イエメンではコーヒーにカルダモンの代わりにしばしばショウガを入れたものを飲みます。また、ハドラマウトのサアル族の場合は、コーヒーカップは素焼きの大型カップです。それで客は手渡されたカップのうちから少しだけ飲んで、いったん主人に返します。そして主人はカップを再び満たして次の客に渡します。

また、彼らには無人の聖者廟を訪れた際など、そこにいくらかのコーヒー豆を置いて立ち去る風習があるそうです。これは旅に疲れた通行人がこの豆を利用して一服のコーヒーを立てて一休みできるようにとの配慮であるのだそうです。その際に、コーヒー立てに必要な器具はすべて廟のなかに常備されているのだそうです。

トルコ人はヨーロッパ世界にコーヒーを紹介した民族ともいえませんが、今日では紅茶の進出が著しく、単にある種の権威を象徴する飲料としてわずかに飲まれている程度にすぎないといわれています。紅茶が国内でかなり生産されているのに反して、コーヒー豆はすべて輸入に依存しています。このために、割高になるということもこの国におけるコーヒー衰退の原因のひとつでありましょう。

飯森嘉助・拓殖大学名誉教授 略歴

1960年3月	国立信州大学教育学部卒業
1968年8月	エジプト・アズハル大学アラビア語学部歴史文 明科卒業
1970年10月	拓殖大学講師非常勤講師
1974年4月	拓殖大学専任講師
1976年4月	拓殖大学助教授
1983年4月	拓殖大学政経学部教授
2003年3月	拓殖大学退任
2003年7月	拓殖大学名誉教授
2012年5月27日	逝去

主な著書

- 『現代アラビア語入門』 黒柳恒男共著、大学書林、1999年
- 『アラビア文字の書き方・綴り方』 泰流社、1978年
- 『実用アラビア語会話単語集』 ウラオカプリンティング出版部、1974年
- 『英・和・アラビア語電気用語辞典』 那須宗和共編、ワセダ・プランニング・クリエート、1982年
- 『新健康野菜モロヘイヤ』 サンロード出版、1992年など

平成24年度第1回タフスィール公開研究会から

イスラーム研究所長 森 伸生

拓殖大学イスラーム研究所のタフスィール公開研究会は今年で7年目を迎えます。毎年クルアーンの一つの章を研究対象として、一年間に7回、または8回の公開研究会を開催してきました。クルアーンは114章ありますが、徐々に章が短くなります。そこで、今年も8章(戦利品章)と9章(悔悟章)の二つの章を研究対象といたします。今年も第一回目の発表を担当し、平成24年5月26日に研究発表を行いました。担当箇所は8章の1~31節までですが、その一部をここに掲載します。

戦利品章(8章)

章の全体的説明:

戦利品章はアッラーの道におけるジハード、戦闘規定、戦闘準備、和平、捕虜、戦利品などに関する法的規定について語っている。

戦利品の章と名付けられているのは、1節において人々が戦利品の規定について質問していることからである。

戦利品章はバドルの戦いの直後に啓示された。バドルの戦いは劣勢ながらムスリムたちが勝利した最初の戦いである。ゆえに、バドルの戦いをフルカーンの日とも呼んでいる。フルカーンとは真理と虚偽を峻別することである。

戦利品章はマディーナ啓示であるが、30節から36節まではマッカ啓示である。マッカ啓示とマディーナ啓示の特徴を挙げると以下のようなものがある。

マッカ啓示の特徴: 教義や内面的な教えが強調されて、アッラーの唯一性、預言者性、終末と来世、諸預言者と諸民族の物語が伝えられている。

マディーナ啓示の特徴: 細かいイスラーム法的規範、啓典の民との論争などがあげられるが、例えば雌牛章においてはユダヤ教徒との論争、イムラーン家章においてはキリスト教徒との論争、食卓章では二つのグループに対する論争、婦人章と悔悟章では偽善者たちに対する論争などである。戦利品章においては戦争と和平に関する規定、バドルの戦いを例に取り上げている。それから、不信者たちの策略の失敗を説明している。

戦利品章はジハードや戦利品に関する多くの教えを伝えている。その主な教えは以下の通りである。

1. 戦利品の分配は預言者の権利である。戦利品の諸規定はアッラーと預言者によって定められる。
2. バドルの戦いでアッラーがムスリムたちに勝利を授けたのは、真理を確立し、虚偽を破壊するためである。そのことについては「たとえ罪のある者たちが嫌がっても、かれは真理は真理とし、虚偽は虚偽として立証されるためである。」(8節)に示されている。
3. バドルの戦いで天使たちが苦戦するムスリムたちを助ける。「あなたがたが主に援助を歎願(たんがん)した時を思いなさい。その時あなたがたに答えられた。『われは、次ぎ次ぎに来る一千の天使であなたがたを助けるであろう。』」(9節)「アッラーは、只これをあなたがたへの吉報となされ、あなたがたの心をそれで安らげられる。勝利はアッラーからだけ(来る)。アッラーは偉力ならびなく英明な御方であられる。」(10節)
4. 真の勝利はアッラーのもとからである。「勝利はアッラーからだけ(来る)。」
5. 「信仰する者たちよ」と呼びかけてムスリムの取るべき戦闘の規定を確立した。

戦場から逃避の禁止、アッラーと預言者への服従、アッラーと預言者への呼応、ウンマの情報を敵に伝えるなど裏切り行為の禁止、アッラーへのタクワー(畏怖の念)、敵を前にして不動の精神、忍耐、アッラーへの祈願などである。

真理が明らかになった後に、預言者との議論は避けるべきであるが、戦闘に関して真理が明らかになる前であったならば、議論は受け入れられる。つまり、クルアーンの中でも、信徒と預言者間で協議を行うことが求められている。戦闘行為の最中には反論や異論は禁じられる。

6. 預言者がヒジュラする際に、クライシュ族の策略から預言者はアッラーによって保護される。「また不信心者たちが、あなた(ムハンマド)に対し如何に策謀したかを思い起しなさい。」(30節)

7. 預言者が中心として存在する限り、人々への試練は行われぬ。「だがアッラーは、あなたがかれらの中にいる間、懲罰をかれらに下されなかった。またかれらが御赦しを請うている間は、処罰されなかった。」(33節)
8. 特に戦闘に関して、準備を整えた後は、アッラーへ全幅の信頼をよせ、全てを任せる。
9. ズルム(悪徳、不義)は破壊と消滅を招く、その影響はウンマ全体に広がる。
10. ウンマの状態は内面の教義や性格の変化によって、墮落から栄光へと変わる。弱から強へと変わる。
11. 財産と子供は試練であり、腐敗への誘惑となる。
12. 戦いに備えて、物質的にも精神的にも準備を行う。
13. 敵が和平を求めれば、戦闘よりも和平を優先する。
14. 盟約の実施は義務である。
15. 盟約、条約の違反には厳しい懲罰がある。「それでもしあなたがたが、戦いでかれらを打ち破ったならば、かれらとその背後に従う者を追い散らせ。恐らくかれらは反省するであろう。」(57節)

テーマと節

- (1)「戦利品の分配規定についての質問、信徒たちの特徴」(1~4節)
- (2)「バドルの戦いにてクライシュ族との戦闘に躊躇する一部の信徒たち」(5~8節)
- (3)「バドルの戦いにて天使たちの支援、一時の睡眠と降雨の恵み」(9~14節)
- (4)「戦列からの撤退、アッラーの許からの支援」(15~19節)
- (5)「アッラーと預言者への服従の命令、不服従に対する警告」(20~23節)
- (6)「来世での生活のために呼びかけに応えること」(24~26節)
- (7)「アッラーと預言者への裏切り、信頼への裏切り」(27~28節)
- (8)「アッラーへの畏敬とその徳」(29節)
- (9)「預言者に対する不信仰者の策略と陰謀の種類」(30~31節)

慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において

(1)「戦利品の分配規定についての質問、信徒たちの特徴」

1. かれらは戦利品についてあなたに問う。言ってやるがいい。「戦利品はアッラーと使徒のものである。だからアッラーを畏れて、あなたがたの間の諸関係を公正に処理し、あなたがたが信者ならば、アッラーと使徒に従え。」

要点: 戦利品はアッラーと使徒のものである。

解説:

イバーダ・ビン・アッサーミトが次のように伝えている。

ムスリムたちはバドルの戦いで得た戦利品の分配について意見(戦利品はどのようにして分配されるのか、その分配を誰が行うのか、それは移住者たち[ムハージルーン]のものか、それとも援助者たち[アンサール]のものか?)が分かれ、預言者にそれについて尋ねた。その時、この節が啓示された。

人々からの質問によって、戦利品分配はアッラーと預言者に任されることが明らかにされた。

これは包括的な規定であるが、同章の41節にて戦利品分配が細かく説明されている。「戦争で得たどんな物も、5分の1は、アッラーと使徒そして近親、孤児、貧者、そして旅人に属することを知れ。もしあなたがたがアッラーを信じ、また識別の日、両軍が会戦した日に、わがしもべに啓示したものを信じるならば。本当にアッラーは凡てのことに全能であられる。」(41節)

戦利品分配はアッラーと使徒の占有事項であると知らされたならば、人々が取るべき行動は三つであると説いている。それは、アッラーへの畏怖、信徒間の公正な調整、アッラーの命令への服従である。具体的には、信徒たちは自分たちの言動においてアッラーを畏れ、戦時においても平時においても、アッラーの怒りを受けることなく、信徒間で分裂を起こすことのないように、互いに争う事態を避けることである。そして、信徒たちは自分たちの仲を改善し、信徒間のイスラーム的信頼を強化し、相互の愛情と慈悲で満たすことである。さらに、アッラーと使徒が定めた戦利品の規定はもとより、すべての命令事項、禁止事項、裁きに従うことである。そして、こ

の三つの事がらはイスラーム社会の安定の基礎でもある。アッラーへの信仰とそれを基礎とする同胞愛と服従である。

2. 信者は、アッラーのことに話が進んだ時、胸が（畏敬の念で）おののく者たちで、かれらに印が読誦されるのを聞いて信心を深め、主に信頼する者たち、
3. 礼拝の務めを守り、われが授けたものを（施しに）使う者たち、

要点：信者の特質

解説：

信仰は服従によって表される。アッラーは先の三つの事がらを実現する信徒の特質を五つあげている。

1. アッラーへの完全な畏怖：アッラーを心から唱え、アッラーの偉大を感じ、アッラーの約束と警告を常に思い起こすことである。「あなたは謙虚な者に吉報を与えなさい。これらの者は、アッラーの御名が唱えられる時、心は畏怖に満ち」（22章34-35節）
2. クルアーン読誦によって信仰強化：クルアーンの一節一節を読むことによって、信仰と確信が増し、正しい行いを受け入れる。クルアーンの中には多くの証明となる事がら記されているからである。例えば、『イブラーヒームが、『主よ、あなたは死者をどう甦らせられるのかわたしに見せて下さい。』と言った時（のことを思え）。主は言われた。『あなたは信じないのか。』かれは申し上げた『いや、只わたしの心を安らげたいのであります。』（2章260節）この節は信仰における安らぎが単なる信仰よりも崇高であることを示している。
3. アッラーへの全幅の信頼：アッラーのみを信頼し、すべてを任せ、アッラー以外に救いを求めない。そのことはすべての原因を受け入れた後の事である。すべての原因を理性的にも慣習的にも受け入れて、その後アッラーにすべてを任せる。すべてのことはアッラーの意志によって起こることを確信しているゆえである。それは信仰の徒の姿である。原因要因を無視することは、真にアッラーを頼ることを理解していない者である。
4. 礼拝の実行：礼拝を定められた規定通りに心をこめて、アッラーの慈悲を求めて、クルアーンの正確な読誦とともに行う。
5. アッラーの道に財を消費：財産の一部を善行に費やす。ザカートの拠出、任意の喜捨、家族のための経費、困っている者への施し、公共施設に寄付、ジハードのために寄付などである。財産はアッラーからの預けられた物であるゆえに、いずれそれを手放さなければならない。

4. これらの者こそ真の信者である。かれらには主の御許にいくつもの段階があり、寛容と荣誉ある給養を与えられる。

要点：信者への報償

解説：

アッラーはこのような特質を備えた信徒に来世にて報償を与える。「アッラーの御許（の報償）においては、彼らの間にも差があるろう。アッラーはかれらの行うことはご存じであられる。」（3章163節）アッラーは彼らの罪を赦し、善行を喜び、彼らに天国での地位を与える。

ダッハク（722年没）は「彼らの間にも差がある」について、「天国の住民は互いに差がある。ある者はより多くの徳があり、ある者は少ない。」と解説している。

預言者のハディース：アッラーのみ使いは言われた、「天国の信者は、彼らの上層に住む人々を彼らよりも秀れた人たちであるため、丁度、東や西の空の方角に輝きながら移動する星を眺めるように仰ぎみる」。

人々が「み使い様、あそこは預言者たちだけの住む所で、彼ら以外には行けない場所なのですか」とたずねると、み使いは「いや、私の生命を御手にされる方に誓って！アッラーを信仰し、その御言葉を信する者らは誰でもあそこに行くことができます」と言われた。

信徒が来世にて差があるように、使徒たちも差がある。「われは、これらの使徒のある者をほかの者より以上に遇した。」（2章253節）

アッラーはムハージル（マディーナ移住者）のムジャーヒド（奮闘努力した者）に対して他のものよりも報償を授けた。「信仰する者、移住した者、またアッラーの道のために財産と生命を捧げて奮闘努力した者は、アッラーの御許においては最高の位階にあり、至上の幸福を成就する。」（9章20節）

まとめ：

1. すべての論争または意見の相違が悪いことではない。時には、意見の相違は良いことへと導かれる。サハーバ（預言者の教友）の意見相違は戦利品規定の解説のための要因となった。
2. サハーバは宗教に関する重要なことについて常に質問していた。
3. アッラーはイスラーム法諸規定の根源である。ゆえに、諸規定はアッラーに求められ、次いで、預言者に求められる。それ以外に求められることはない。戦利品分配は実際に、預言者に任されたのである。
4. 共同体の健全さ、力、荣誉は次の三つによって保証される。それは、すべてにおけるアッラーへの畏怖、共同体における信徒間の状況改善、アッラーと使徒への忠誠と服従。
5. アッラーの命令の実行は信仰の結果である。信徒の道とはアッラーの諸命令の実行である。
6. 「信者は、アッラーのことに話が進んだ時、胸が（畏敬の念で）戦（おののく者たち）の節は戦利品分配で使徒が命じたことに関して、使徒への忠誠と服従を奨励したものである。
7. 信徒の特質
 - (1) アッラーへの畏怖：アッラーへの信仰の強さ、アッラーを常に意識しての行動、畏怖の根幹は正しい知識と心からの信頼である。
 - (2) クルアーン読誦による信仰の強化：アッラーは信徒の状況を語っている。「あなたはかれらが、使徒に下されたものを聞く時、自分の認めた真理のために、涙を眼にあふれさせるのを見るであろう」（5章83節）
 - (3) アッラーへの全幅の信頼：信徒はアッラー以外に助けを求めたことはない。信徒はアッラーが望むことは成就し、望まないことは成就しないことを熟知している。
 - (4) 礼拝の実行：諸規定どおりに礼拝を実行する。
 - (5) アッラーの道のために財産の一部を使用する。つまり、善行と愛情と信仰のために使用する。
8. 「これらの者こそ真の信者である。」は、このような信徒になるには全てにおいて実際にそうでなければならないことを、表面的な行動であってはならないことを示している。そのことをハリスの話が伝えている。ある男が「アブーサイードよ、あなたは信者であるか」と尋ねた。彼は答えた、「信仰には二通りある。もし、あなたが私に、アッラーへの信仰、諸天使、諸啓典、諸使徒、天国、地獄、復活、審判への信仰を尋ねるのであれば、私はそれらを信じるものです。だが、あなたが私に、『信者は、アッラーのことに話が進んだ時胸が（畏敬の念で）戦（おののく者たち～これらの者こそ真の信者である。』について、問うているのであれば、アッラーに誓って、私はそれらの信者の一人であるか否か、私には分かりません」と答えた。
9. 信仰の増減：シャーフイー、アハマド・ビン・ハンバル、アルブハーリーなど多くのイスラーム学者が「信心を深め」の節を根拠として、信仰は正しい行いによって増加することを主張している。信仰は確信と決意と行動の表現であるとしている。信仰について、預言者は次のように語っている。「信仰には70以上、もしくは、60以上の種類がある。その最善なるものは、アッラーの外に神はないと証言することであり、最も小さな信仰とは道路から邪魔になる者を片付ける行為である。謙譲も信仰の一つである」（サヒーフ ムスリム 1巻 P.52）



講演を行う森伸生イスラーム研究所長

インドネシアの伝統的結婚式 —西ジャワの花嫁—

イスラーム研究所客員教授 武藤 英 臣

ジャカルタの結婚式への招待

今年3月9日（金）エジプトのアズハル卒業生連盟インドネシア支部長の末娘が結婚するというので同じ卒業生である同研究所客員教授徳増公明氏と共に、招かれてジャカルタ支部長宅を訪ねた。彼の名は、Dr. Shehab（シハーブ師）、インドネシアのアズハル卒業生達の総元締め。彼の家は、ジャカルタ市内南区にある。東京でいえば浅草、深川あたりといえる。ジャカルタに人々が住み始めた最初の場所といわれ、道路は狭く、くねくねし、民家が密集する、ジャカルタの下町だ。車一台がやっと通れるくらいの狭い道路を進み続けると、突然目の覚めるような大空を持つ広場についた。そこは、シハーブ家が寄進したマスジドであった。シハーブ師の家は、そのマスジドの裏側にあった。正面玄関は通常の小さな軒家のような門構えであった。シハーブ家は最初からジャカルタのこの地区に居を構えた由緒ある旧家とのことで、外観からはその全体を窺い知ることが出来ない家である。家の玄関脇の細い通路を抜けて奥へ進むと、芝生に覆われた広い中庭に出る。20メートル程のプール、母屋、離れ、台所等、中庭を囲むように色々な建物が建っている。それはアラブ風な住居の作り方で、シハーブ家とアラブの繋がりを示すものだった。

案内のジャカルタ支部事務局長Dr.Mokhlisによれば、シハーブ家は、代々イスラーム学者を輩出し、その祖先はアラブであるという。シハーブ師は現在、ジャカルタ・クルアーン教育大学の学長兼理事長である。なお、家には特別な弟子達を直接教育する私塾を持ち、彼の家には50名程の塾生達が寄宿しており、彼らが一度に食事の出来る大広間は、そのためにあるという。

どういっきっかけだったか自分でもよく思い出せないのだが、私は同師とも同師の兄オマル氏とも古くから懇意にしていた。そこで今回、インドネシア・西ジャワ島に古くから伝わる伝統に則った結婚式が見られるということで出かけてきたのである。



花嫁を見守る両親

結婚式前日

明日は、結婚の日（正確には結婚契約日：アクド・ニカーハ日）ということで、シハーブ師宅は家族・親戚・近隣のお手伝いの人々が忙しく立ち働いていた。

我々は、花嫁の部屋に特別に案内してもらえた。この部屋には花

嫁、花婿、花嫁の両親、花嫁側女性親族しか入れないという。そこには、両手、両足にヘンナ化粧が丁度終わり、白いジャスミンの花を丁寧に繋ぎ合せ作られたケープをはおり、頭にも同様な白いジャスミンで作られたバンドナをした花嫁がいて、我々を出迎えてくれた。

シハーブ夫人はエジプト出身で、四人の娘に恵れ、今回の末娘の結婚でシハーブ家の結婚式は終わるという。花婿はジャワ出身ではないということで、この部屋の右奥に別の部屋があり、そこで今夜は過ごすとのこと。

花嫁清め儀式

結婚を明日に控え、女性達だけで末娘が一人前の娘になったことをアッラーに感謝し、その身体を清めて花婿のもとへ送り出す「花嫁清め儀式」が中庭のプール・サイドで、厳かに行われた。

中庭に一つイスが置かれ、左横に薔薇やジャスミン、その他色々な花を浮かべた清めの水が入った水瓶が置かれている。進行役の女性が、儀式開始を伝え、ついで女性の歌声が始まった。歌と言うより、高音で、すすり泣くような声で歌われる子守唄のようであった。バックグラウンド・ミュージックだろうが、一人の女性が大声ではなく声を震わせる歌い方でずっと最後まで歌い続けていた。

進行役が人物名を讀上げ、名を呼ばれた女性が花嫁の前に進み出て、一言二言話しかけてから、水瓶から柄杓で水を一杯すくい上げる。柄杓は色々な花卉（はなびら）で覆われている。ゆっくりと花嫁の右肩から花卉と一緒に水を注ぐ。次いで、再度柄杓を水瓶に戻し、もう一杯の清め水を、今度は花嫁の頭からゆっくりと注ぐ。その間何かを唱えている。花嫁の右肩や、頭には花卉が残っていてその香りがかすかに漂っている。柄杓を水瓶に戻し、そっと花嫁の頬に口づけし、花嫁におめでと声をかけて終わる。そして家人の女性がその人にお礼の品物を手渡すと、次の人の名が呼ばれ同じように花嫁に清めの水を注ぐ。

この儀式では、20名以上の女性が次々とこの水を花嫁に注いだ。その間、両親は末娘の様子をじっと見つめ、父親は涙を浮かべていた。

その後、近親親族・特別な招待客だけで家の大広間で祝宴が行われ、夜遅くまで続くとのことであった。

シハーブ師の説明によれば、明日の結婚の契約（結婚式）は、家の裏側にあるマスジドで朝九時から行われるとのことであった。そこで明日の式への参加を約束して我々は、御暇することにした。

結婚契約式

マスジドでのアクド・ニカーハ（結婚契約）には千人近くの人々が集まった。出席した宗教省次官はこの界限に入ったのは初めてだと言っていた。たまたま一緒になって、まず、シハーブ師の家を訪れ、御祝い品を手渡し、そこで、お茶を一杯ふるまわれ、マスジドへ向かった。

シハーブ家で昨夜過ごした花婿を、10名程の鼓笛隊（トランペットや太鼓やタンバリンを打ち鳴らすグループ）が先導して、マスジドまでの行進が始まった。なんと賑やかなことか、近くに立っていると耳を塞がなければならないほどであった。

午前9時、予定通り儀式がマシド二階の礼拝所で始まった。先ず、クアーン朗誦、次いで、総合司会の人立ち上がり、今日の式次第を説明した。それによると儀式が終了次第、マシド一階のホールで昼食が振る舞われるとのことだった。

アクト・ニカーハの儀式そのものは最後にサインをしてほんの数分で終わった。しかし、その後でクアーン朗唱から始まり、数十人の列席長老達からの祝辞とアッラーへの賛美、最後に、父親が長々

と新しい息子へ人の道を説き、会衆への謝辞を述べて終了したのは正午に近かった。

インドネシアでの結婚式に出席したのは初めての体験だったが、式の前日に行われる花嫁の身内だけしか参加できない、おそらくインドネシアでもこの地域独特であろう儀式を特別に見せてもらったことはとても貴重な体験だった。そしてこの儀式の一端を報告できたことを嬉しく思っている。

「第9回マレーシア国際ハラール展示会 (MIHAS 2012)」視察報告

イスラーム研究所客員教授 遠藤利夫

2012年4月4日(水)から同7日(土)の4日間に亘りマレーシアの首都クアラルンプールで開催されたマレーシア貿易開発公社(MATRADE)主催による「マレーシア国際ハラール展示会」(Malaysia International Halal Showcase, MIHAS)を視察したので報告する。(注:ハラールとはイスラーム法上、合法的なもの、許されたものを意味するアラビア語。)

開催場所は、クアラルンプール コンベンションセンター (KLCC)であった。近くには、89階建て、高さ452mのツインタワーとしては世界一高いビルがある。

同展示会には加工食品や飲料、菓子類など食品を中心に、マレーシア国内外から約400社が参加し500を超えるブースが出ていた。海外からは隣国のインドネシアをはじめ、アジアや中東諸国、欧州からも出展していた。今回はサウジアラビアの企業が様々なデザート(ナツメヤシ)の展示していたのが目を引いた。中国からは甘粛省や貴州省などの企業が加工食品や茶などを出展していた。台湾や韓国、日本からも数社が出展していた。

マレーシア国内には、ハラール証明書を受けている企業が4,758社あり、その内、700社がマレーシア製品を海外に輸出している。昨年度の輸出額は、パーム油を除き350億リンギ(約9,100億円)で、この数値はマレーシアの総輸出額6,940億リンギの5%に相当する。現在、世界のハラール食品マーケットの規模は年間6,610億ドルで世界の食品産業の16%を占めている。(同数値は、マレーシア

の新聞New Straits Times、2012年4月5日掲載のもの。)ハラール市場全体の規模としては、ヘルスケア製品、化粧品、パーソナルケア製品、医薬品、包装材、銀行や金融など非食品部門の方がはるかに大きい。

4日の展示会開催式に挨拶した、ムスタファ・モハマド国際通商産業大臣は、マレーシアは、イスラーム金融を取り込んだように、ハラール食品についてもリーダー役でなければならないと強調し、「われわれは、2020年までに、ハラール・ハブになる地歩を着々と固めている。すでに(ハラールの)概念、製品、目的、方法、および認証などを規定した。現在、障壁となっているのは、多数の国々の規格が存在し、統一されていないことである。」と述べ、世界基準の確立が今後の課題であると述べた。

マレーシアでは、マレーシア標準局がハラール監督の中心となり、2009年にはハラール食品の取り扱いと製造のためのガイドラインを規定するMS1500:009を発表している。2011年には、国内に複数あったハラール認証ロゴの発行権限をJAKIM(マレーシア政府総理府イスラーム開発局。マレーシア唯一のハラール認証機関)に限定するなどハラール食品の管理を一元化した。海外の認証団体との対応については、公認認定のガイドラインを策定し、JAKIMのウェブサイト海外認証団体リストを掲載している。ハラールに関する世界基準を確立することについて、マレーシアは、イスラーム諸国会議機構(略:OIC。57カ国が加盟する国際機関)レベルでのハラール・スタンダード構築を進めている。



マレーシアの古いハラールマークの種類



会場全景

お問い合わせ先：拓殖大学イスラーム研究所
〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14
TEL：03-3947-2419 FAX：03-3947-9416
ホームページURL: http://www.sri.takushoku-u.ac.jp

拓殖大学 イスラーム研究所 ニュースレター

平成24年6月20日発行 第35号
発行人 拓殖大学イスラーム研究所
編集人 イスラーム研究所主任研究員
柏原 良英

正統四代カリフの時代－アブーバクル（13）

（前回からの続き）

アブーバクルの父親アブーフアーハはまだイスラームに帰依しておらず、息子アブーバクルの行動を理解できず、アブーバクルが奴隷を解放しているのを聞き及んで、彼に言った。「息子よ、弱い奴隷達を解放しているそうだが、どうせ解放するのならば不屈の男達を解放したほうがいい。そうすれば、おまえの助けを必要とせず、自分で生きていくことができるよ。」

アブーバクルは次のように答えた。「父上、私は私が望むように行ないます。偉大なるアッラーの言葉が次のように下ったのです。『施しをなし、主を畏れる者、また至善を実証する者には、われは至福への道を容易にしよう。だが、強欲で、自惚れている者、至善を拒否する者には、われは苦難への道を容易にするであろう。かれが滅び去ろうとするとき、その富はかれに役に立たないであろう。』(92章5～11節)」

アブーバクルが財産を費やすのも、決して現世の見返りを期待するのでもなければ、名声を得るためのものでもなく、イスラームの道のために弱き人々を限りなく助けていくためであり、それは揺るぎなき信仰の発露であった。

「布教での苦難と預言者の保護」

アブーバクルは可能な限りの方法でイスラームの布教に全身全霊を注いできた。そして、アブーバクルが最も気に掛けたのは預言者の身の安全であり、イスラームに帰依してからは預言者の身を守るために出来るだけ預言者と一緒に居るように心がけた。アブーバクルは自分の身を挺して預言者の身を守っていた。その一例をあげると・・・

クライシュ族の人々がカアバ聖殿があるハラーム境内の中で屯して座り、預言者や彼の教友がクライシュ族の神々について言っていることを、お互いに苦々しく思いながら話しあっていた。丁度その時、預言者がハラーム境内へ入ってきた。彼らは預言者へ近付き怒声を張り上げた。「お前は我々の神々についていろいろなことを言っているようだな。」預言者は「確かに」と答えた。彼らは預言者を取り囲んだ。人々の悲痛な叫び声のアブーバクルに届いた。「あなたの友が捕まったぞ！」

アブーバクルは即座に家を出ていき、ハラーム境内に入った。そこで、人々に囲まれている預言者を見付けた。アブーバクルは彼らの注意を預言者からそらすために彼らに向かって大声で叫んだ。「おまえ達に呪いあれ。『あなたがたの主から明証をもたらし、「私の主はアッラーである。」と言っただけのために、一人一人を殺そうとするのか?』(40章28節)」

これを聞いたクライシュ族の人々は預言者をそっこのけにして、怒りをアブーバクルへ向け、彼を取り巻き、力の限り殴り付けた。だが、アブーバクルは彼らに預言者の髪一本も触れさせることはなかった。そして、彼らの虐待が過ぎ去り、アブーバクルは預言者と一緒に家族のもとに帰ってきた。預言者もアブーバクルも如何なる虐待にあっても「権威と高貴の主、あなたはいと高きお方であられる。」とアッラーの偉大さを讃えるだけであった。・・・

アブーバクルは身を挺して預言者を護り、いかなる迫害をも恐れなかった。たとえ、相手が大勢であろうが、少なからうが誰をも恐れることはなかった。それはカアバ聖殿の前で布教に立ち上がったときも同じであった。・・・

イスラーム教徒が38人に達したとき、アブーバクルは預言者に公然と布教するように求めた。預言者は「アブーバクルよ、我々はまだまだ少数である。」と言って、アブーバクルの意見を退けたが、

アブーバクルはなお、しつこく求め続けた。とうとう預言者も認める形となった。周りにいたイスラーム教徒達もそれぞれに納得して自分の家族が座っているハラーム境内の端々に散っていった。

アブーバクルは人々の間に説教者として立ち上がった。預言者はアブーバクルの側に座っていた。最初の説教者としてアブーバクルはアッラーとアッラーの使徒に従うことをカアバ聖殿の周りにいる人々に呼び掛けた。クライシュ族の人々はアブーバクルの突然の説教に驚くと同時に異常なほどの敵意を剥出しにした。アブーバクルに対しては勿論のこと、ハラーム境内の端々に家族と一緒にいたイスラーム教徒達もクライシュ族の人々の激怒の的となった。イスラーム教徒達はハラーム境内の端々で徹底的に殴られ、アブーバクルは足で踏み付けられたり、殴られたりあらゆる虐待を受けた。そこへ、クライシュ族の中でも乱暴者のウトバ・ビン・ラビーアがアブーバクルへ近付いてきて、草履を片手に彼を殴りはじめた。彼の顔が血だらけになっても、彼の腹の上ののって、さらに鼻の形が崩れるほどに殴り付けた。

（次号に続く）

講演会・研究会報告

【平成24年度第1回タフスィール公開研究会開催】

今年度第1回目のタフスィール（クルアーン解釈）公開研究会が、5月26日午後2時より文京キャンパスC館で開かれた。講師は森伸生イスラーム研究所長でクルアーン第8章戦利品章1～31節を解説した。詳細は、当ニュースレター4～5ページ参照。

【平成24年度第1回講演会開催】

毎年、「イスラームと食文化」をテーマに行っている講演会を6月9日（土）午後1時より東京赤坂にあるトルコ料理レストラン「アセナ」で開催した。講師は、有見次郎当研究所客員教授で、イスラームの食に関するハラール（合法）、ハラーム（非合法）や食事のマナーについて講義が行われた後、参加者はトルコ料理を味わいながら楽しい一時を過ごした。

محتويات العدد

- 1 . مقالة عن القهوة
أستاذ فخري : إيموري كاسوكي
- 2 . تقرير عن محاضرة تفسير القرآن الكريم
مدير معهد دراسات الشريعة : موري نوبوأو
- 3 . تقرير عن المعرض العالمي للحلال (مباحس) 2012
الأستاذ الزائر : إيندو توشينو
- 4 . مقالة عن حفلة النكاح في إندونيسيا
رئيس لجنة دراسات الشريعة : موتو هيدينومي
- 5 . مقال : الخلفاء الراشدين (13)
مدير معهد دراسات الشريعة : موري نوبوأو
- 6 . أخبار المعهد: الدور الأول لدراسات التفسير (سورة الأنفال)
المحاضرة الأولى للمأكولات والحضارة الإسلامية :